

大橋図書館 成立事情とその背景

奥泉, 和久

(出版者 / Publisher)

法政大学資格課程

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学資格課程年報

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

53

(発行年 / Year)

2021-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00024775>

大橋図書館 成立事情とその背景

法政大学キャリアデザイン学部兼任講師 奥泉和久

はじめに

都立中央図書館の前身は、都立日比谷図書館（千代田区に移管され現千代田区立日比谷図書文化館）であり、都制施行以前は市立日比谷図書館で、創立時は1館のみであったことから東京市立図書館と称した。首都東京では、公立図書館ができるまで私立大橋図書館が、その役割を担っていた。同館は、紆余曲折を経て、現在は三康文化研究所三康附属図書館^{註1}に継承されている。

大橋図書館の歴史、設立者大橋佐平、大橋新太郎についての伝記は、いずれも坪谷善四郎によってまとめられている。坪谷は、博文館の編集業務、大橋図書館の運営に携わっていたことから、記述の信頼度は高いと思われる。図書館開館時の様子、また運営の経過などに関しても詳細に記述されているが、坪谷自身が図書館の創設に関与していたことから、自明の理とみなされたのであろうか、成立事情に関しては必ずしも十分とはいえないように思われる。佐平、新太郎本人による記録が残されていないことから、佐平の相談相手となった、石黒忠恵が設立の経緯を詳しく伝えている。しかし、随時紹介していくが、資料の作成時期により内容に違いもある。

もとより、図書館事業は、博文館の出版事業の成功による産物であり、本業あったのことで考えるべきかもしれない。とはいえ、佐平の最後の事業である大橋図書館が、いかなる考えによって成立したのかを明らかにすることは、この国の首都東京の図書館を考える一助になるかもしれない、また、佐平の図書館観を知ろううえでも意味があるのではないか。

そこで、佐平と彼を取り巻く人びとの発言、さらには同時代の図書館をめぐる動向などを手掛かりに、大橋図書館の成立事情を検討してみたい。

1. 先行研究と分析の視点

(1) 先行研究

大橋図書館について注目した文献を遡ると、竹林熊彦の論考に辿り着く^{註2}。これは『大橋図書館四十年史』

（以下「四十年史」）^{註3}の刊行を受けて執筆されているので、書評といってもよいかもしれない。ここで竹林は、極端な言い方としながらも、博文館が出版事業をやめたところで日本文化上にさほどの影響はないが、大橋図書館の発展は日本文化の進歩発展を意味すると評し、40年前（竹林の論考は同館設立の40年後にあたる）に着目した佐平の「達識」を伝えるには、同書に佐平伝が欠落していると苦言を呈した。しかし、それ以上の興味がなかったのか、のちに『図書館物語』（東亜印刷出版部、1958）で私立図書館を論じているが、そこでは新潟県長岡市の互尊文庫について述べるなか、大橋図書館については概説するにとどまっている。

近代日本の公共図書館史のうえでは、石井敦が、公立図書館が発達するまでの過渡期に出現した私立図書館と評価した^{註4}。永末十四雄も、東京市立図書館の前史に位置づけているものの特段の成果を認めているようには見えない^{註5}。近年、石山洋は、石井の「日本の社会の近代化に伴う内部矛盾の顕在化を恐れた上流階級の一種の慈恵的思想のあらわれであろう」^{註6}との文言を引いて、これに対し、最近のことばと注釈して「企業メセナの活動と見たほうが妥当ではなからうか」^{註7}と述べた。これは一見大橋図書館の再評価のようにも感じられるが、佐平が図書館を目指した理由からは遠のいている。そればかりか「出版関連業界で一人勝ち的成功に対する同業者の妬みへの言い訳的意味もあったであろう」と、同館設立の趣旨に対する関心は薄い。

これらに対し、佐藤政孝は、大橋図書館の開館時の状況に加え、関東大震災後の再建復興とこれに続く戦前期における充実した活動を分析・評価した^{註8}。奥泉は、公立図書館が不振の時期に、欧米の教育・文化施設を視察し、公共図書館の活動に刺激を受けて私立図書館がつくられたこと、また、東京市が都市化を進めるなか、大橋図書館が近代的な施設・設備、サービスを展開したことを指摘した^{註9}。

是枝英子は、「大橋佐平と大橋図書館」^{註10}でこのテーマについてはじめて本格的に論じ、第3章の通史では、創立から戦前期にかけてこの国の首都における代表的な図書館に成長したと論じた。興味深いのはその前に置かれた第2章「なぜ図書館だったのか」で、かつて坪谷善四郎と雑誌『太陽』について分析したこと

をもとに^{註11}、大胆な推論を展開した。それは、たとえば佐平が図書館によってさらに読者層を広げ、出版業にも利益をもたらすと考えた^{註12}、であるとか模範的な図書館をつくってやろうという意図があった^{註13}、などであるが、いずれも裏づけが示されているわけではなく、飛躍しすぎているように思われる。

佐平、新太郎父子の伝記はさまざまあるが、大橋図書館については紹介程度で、分析しているものはほとんどない。そのなかに佐平の全体像を描いた稲川明雄の大著『龍の如く：出版王大橋佐平の生涯』がある。記述の多くを長岡時代に充てていることもあり、上京後の記述は限られるが、終章に、最後の仕事と大橋図書館を位置づけ、図書館設立の動機にも言及している。そこでは長岡の野本恭八郎の長男を博文館で預かっていたことに触れ、「その野本福松のためにも、図書館をつくり社会の公益のために、自分の財産を使おうと考えていた」^{註14}と述べた。ここで福松を引き合いに出しているが、佐平が個人的な感慨にとらわれていたというようなことではなく、社会で働きながら学び続ける青少年への支援を意図していた、ということではないか^{註15}。

佐平による大橋図書館の創設を、竹林の言うとおりに「達識」ととらえると、それに相応しい結論を導き出さなければならないと考えるのは無理もない。しかし、果たしてそれでよいのか。同館に関する事実を積み重ねるなかから、成立事情と佐平らによる図書館設立の意図を再考する必要がある。

(2) 分析の視点

上にわざわざ戦前の竹林の評を引いたのは、佐平の「達識」が何に由来するのか、その答えがいまだに明らかになっていないのではないかと、いうことを言いたかったからであり、その意味において是枝の推論の立て方には不満が残るが、「なぜ図書館だったのか」との問いの立て方には首肯できる。資料が限られていて、その解明に困難が予測されるが、大橋図書館の成立過程について分析を加えてみることにする。

そこで、図書館成立までの経過について、佐平の欧米視察前後、帰国後の動向、開館準備までの時期に沿って検討を加える。欧米視察以前、佐平は、出版業で得た利益を社会に還元することを発案し、それに新太郎は合意している。帰国後しばらく経った1898（明治31）年、佐平は、大倉喜八郎の還暦銀婚祝いに出席し、同席した石黒忠恵に公共事業について協力を依頼した。翌年の夏、その次の年にも佐平は石黒を訪問して図書館のことを相談している。その結果具体的な道筋がつけられることになることから、二人の協議については詳しく見ておく必要がある。その後協力者との協議が進展していく。そこで坪谷善四郎が実務を一手に引き受けることになる。坪谷の行動からも設立をめぐる動

きが見えてくる。また、それらの背景として図書館令公布前後の東京市の図書館状況も無視できない。

大筋では以上のとおりだが、経過を詳しく見ていくと資料により異同が散見される。坪谷によって多くの資料がまとめられているが、坪谷が見聞きしたことと佐平、新太郎からの伝聞を区別するのは容易ではない。また執筆の時期にも注意を要する。佐平から大橋図書館設立に関し相談役を託された石黒は、さまざまな場面で同館成立に関するエピソードを披瀝している。この証言は、時期による精粗はあるものの佐平との会話をそのまま伝えていて重要な意味をもつ。

石黒の回想を軸に、坪谷善四郎による記述と併せて、大橋図書館成立までの過程についての主要な文献を成立順に記す。

1901年 石黒忠恵「故大橋佐平翁の逸話」^{註16}（以下「石黒逸話」）

1902年 石黒忠恵男の演説[1902.6.15]^{註17}（以下「石黒演説1902」）

1912年 石黒忠恵「密教趣味の修養」[1912]^{註18}（以下「石黒追懷」）

1926年 石黒忠恵「建設と復興の始末」[1926.6.15]^{註19}（以下「石黒演説1926」）

1932年 坪谷善四郎『大橋佐平翁伝』^{註20}（以下「佐平翁伝」）

1936年 石黒忠恵『石黒忠恵懷旧九十年』^{註21}

1937年 坪谷善四郎『博文館五十年史』^{註22}（以下「博文館史」）

1937年 坪谷善四郎『大橋新太郎伝』^{註23}（以下「新太郎伝」）

1942年 坪谷善四郎「四十年史」^{註24}

このように根拠となる資料の作成時期に大きな開きがあり、かつ重複する内容も少なくない。図書館開館へ向けた経過を整理し直すことから着手する必要がある。

2. 図書館構想の形成

(1) 欧米視察前後

大橋佐平^{註25}は、長岡で書店経営、「越佐毎日新聞」創刊などを経て、1886（明治19）年に上京して本郷区弓町に居を構え、翌1887年6月、博文館を創業した。このとき53歳。そのあとすぐに日本橋区本石町の2階建土蔵付き家屋に移り、大ヒット商品「日本大家論集」を創刊する。1890年には、図書出版へと進出した。1892年11月、同館は日本橋区本町に移転した。この時期には、各種雑誌を発行、その販売も好調で、出版業として成功をとげ^{註26}、大橋図書館が誕生することになる。

その成功は、「国民教育普及の恩沢」^{註27}によるものであり、その感謝の方法を講ずることを期して図書館

の設立を考えた「四十年史」は記す。「図書館設立の趣旨」にも「常時潜に以為らく、斯業若し聖世の余沢に潤ひて、幸ひに成功するを得ば、希くは図書館を設立して謝悃の微意を表せんと。」とある。佐平による図書館設立の発意については、「公開の図書館を建設することが最も適当であると考え新太郎の賛成をも得ていた」（「佐平翁伝」）^{註28} というように、佐平、新太郎父子共通の理解、認識のもと将来への展望がなされていた。このことは、佐平から新太郎へと事業主体が引き継がれていくうえでの大きな原動力となった。

1893年3月から9月にかけて、佐平は欧米を視察しているが、図書館については「未だ具体的の方案を決せず」^{註29} と構想の初期の段階であった。ところが視察先で「かの地においては各国ともに図書館の設備ありて……米国には大富豪カーネギーのごとき」人物が図書館普及に尽力していることを知る。そこで佐平の図書館に対する構想が一気に膨らんだ。「四十年史」には、帰朝の際に佐平が上田万年^{註30} と数十日間同船し他日図書館設立の希望を語ったと記す^{註31}。同じく坪谷善四郎^{註32} がまとめた「博文館史」^{註33} にも同様の記述がある。一方、「新太郎伝」は上田を「洋行中以来の親しき知人」^{註34} と記すにとどめている。ところが別の資料によると、上田が帰国したのは、佐平帰国の翌年6月とされている^{註35}。このとおりだとすると、上田とのエピソードは帰路でなかったことになる。ではあっても、佐平は、欧米視察中に現地で留学中の上田と出会い、そこで図書館について話をし、以降親交を深めたことに変わりはない。

（2）帰国後の動向

欧米視察からの帰国後、佐平は、新太郎と相談、「愈々公益の為に図書館を設立して社会に寄附することを決心」^{註36} して図書の収集を開始したが、その時期やきっかけについては明らかではない。また、佐平が帰国後「間もなく」石黒を訪ねたとする資料もあるが、これもいつのことかはっきりしない。時期が特定できる記述を検討していくことにする。

1898（明治31）年5月、大倉喜八郎^{註37} の還暦銀婚祝いが行われた。このときに、大倉は、石黒忠憲^{註38} らに委託して私立商業学校を創設すると発表した。佐平は、会に出席していて、この席で石黒に博文館創立15周年の記念に「私も何か世の中を益するものを一つ記念として遺さうと思う」と約束した^{註39}。翌1899年夏、佐平が石黒を訪問した際、前年に大倉邸で話した博文館の記念事業について、書籍館にしようと思うがどうかと聞いている^{註40}。このとき石黒は、専門家に相談するよう話をしたという。

1900年9月下旬、再び佐平は、石黒に図書館のことを相談している^{註41}。専門家に相談するように助言されてから1年後、あらためて石黒に依頼をしたという

ことになる。石黒は、自分は専門家ではないとしながらも佐平の依頼に応じた。このときのことを石黒は、図書館設立の「発端」としている。これについては次の章でももう少し詳しく検討する。この頃には 収集した図書は3万余冊となっていた^{註42}。年間に1万冊とすれば、開始の時期は大倉の祝会の頃になる。

同じ頃、佐平は、談話録「知自心百話」をまとめていた。「はしがき」には「明治33年7月」との日付がある。そこに「今後においては私立図書館を起して公衆の便益を謀らんとす」^{註43} と記されている。この談話録は未完に終わったが、図書館設立の構想について明確な意思をもっていたことを伝えている。そして、そのことを石黒に相談した時期とも一致している。

（3）大橋乙羽への継承

長岡では、娘養子が跡取りになるという伝統があった^{註44}。博文館の経営が軌道に乗っていた1894（明治27）年11月、佐平は娘時子の婿に渡部又太郎（乙羽）^{註45} を迎える。又太郎は、1869年羽前（山形県）米沢に生まれ、1888年に上京して、東陽堂に入社。その後『風俗画報』の編集を担っていた。硯友社同人でもあり、1894年、尾崎紅葉とともに博文館の『校訂西鶴全集』を編集（校訂）したことが、館主らの目にとまる。婿入り後は、博文館の営業・編集に携わり、編集者としての頭角を現す^{註46}。翌1895年、博文館は従来の雑誌を『太陽』『少年世界』『文芸倶楽部』に集約して創刊する。乙羽は、樋口一葉の作品を『文芸倶楽部』などに次々と掲載、世に送り出した^{註47}。

1900年1月、乙羽は、博文館支配人となる。3月欧米視察に出発。7月パリ万国博覧会にあわせて開催された「巴里万国著作権会議」には、留学中の山田三良に勧められて出席している^{註48}。

紅野敏郎は、このときの欧米留学について、「留学もつまり博文館の意図でもって、図書館あるいは出版状況、活字の状況、いろんなものをしっかり身につけてこい、というそういう意図」^{註49} があったと指摘している。乙羽は、紀行文でも名声を博したが、『欧米小観』はこの視察を題材としている。同書には欧米の印象がどのように記されているか見ておこう。

如斯（かくのごとく）欧米人の脳裏には、一種の公徳が潜んでいる、で何地（どこ）の市街、何地の地に行くも、誰某（なにがし）の建てたる書籍館（しょせきくわん）、何某の建てた植物園、或は会堂であるとか、或は倶楽部であるとか……

然るに翻つて我国の形成を見るに、豪商紳士と称せられてゐる人人に、此等の美德が備つてゐやうか、偶々（たまたま）私立の学校を設立するものがあるかと見れば……故に予は文明と云へる熟語は、寧ろ分明と書き直した方が適当であると思ふ、……^{註50}

この少しあとには別のエピソードを引いて、彼の地には「公共的精神が籠つて居る」^{註51}とも記す。乙羽にとって主要な目的は、出版人として欧米の出版事情を視察することだったのであろうが、佐平からはこれに加え図書館、公共の精神についても見聞を広めるよう指示されていたことがうかがえる。引用には「書籍館」が見えるだけでなく、「公德」も、また、私立学校の設立についての記述もある。それは自国では稀有のこととしている。これは上記のとおり、大倉が私立学校を設立したことを指す。乙羽も、この園遊会に出席していた。ただし、乙羽は招待ではなく高等接待員（『太陽』の編集者）として参加、その状況を同紙に写真入りで紹介した^{註52}。

後述するように、帰国の翌1901年1月9日、佐平が図書館の設立について、関係者・親族を集めた会議の席に、博文館の支配人である乙羽も呼ばれている。佐平からは、博文館のみならず、図書館運営についても後継を託されたのではないかと推察される。

3. 大橋図書館の成立

(1) 佐平の発言と図書館状況について

石黒がのちに大橋図書館設立の「発端」として、1900（明治33）年9月下旬の佐平の発言は次のようだった。

図書館は文明世界に大必要のものだ、然るに此帝国の大都に、図書館が幾つあるか、門戸を開て、公衆の覽に供するものは、上野に一ヶ所、お茶の水に一ヶ所、それ限りだ。拙者も書籍販売で身を立てた冥加の為に、図書館を建て、公衆に益したいと思ふ。^{註53}

この趣旨には、当時の図書館状況が反映されている。まずはそのことを確認しておこう。この前年の1899年、図書館に関する初めての単独の法規、図書館令が公布された。ところが、この年全国の図書館は、公立12館、私立25館、計37館。私立図書館の割合は67.6%であり、「公私立図書館中其施設漸ク整ヒ図書ノ数モ逐年増加シ閲覧人員亦多キヲ加フルモノアリト雖多クハ概ネ規模狭小ニシテ設備完カラサルモノ少カラス」^{註54}（文部省年報）といった状況で、東京には上野に帝国図書館、一橋の帝国教育会附属書籍館の2館があるだけで、図書閲覧者数はそれぞれ111,630人^{註55}、17,935人^{註56}と公共図書館の不振は見てのとおりだった。そればかりか帝国図書館の閲覧室も「極テ狭隘ニシテ悉ク来館者ヲ入ルル能ハズ謝絶シテ失望セシムルモノ日ニ数十百人ヲ下ラズ」といった有様で、佐平の発言は、法が整備されたにもかかわらず、現実には東京市の人びとが図書館を利用できる状況にないことを言い表していた。

東京の図書館をめぐる状況をもう少し詳しく見てお

く。東京市は、市制・町村制にもとづいて、1889年に15区が設けられた。市長、助役は置かれず、1898年に市制特例撤廃法が成立、一般市制が施行されて、東京市は完全な自治体となった。新たに誕生した東京市の「教育の普及改良を図る」（東京市教育会規則）^{註57}ことを目的に、1900年東京市教育会が設けられた。市の教育改善に向け「図書館其他通俗教育に関する事業を経営する事」（同規則）^{註58}と図書館についても展望が示されていた。

(2) 図書館設立の準備

1901（明治34）年1月9日^{註59}、佐平は石黒を訪ねた。医師から胃がんを宣告され、余命が1年あるかわからないこと、博文館の創立15周年は1902年であり、生前に図書館設立に着手したい旨を石黒に告げる。総額約12万5千円の資金計画と協力者に上田万年^{註60}、帝国図書館長田中稲城^{註61}、財団の設立、財務に関しては安田善次郎^{註62}の名をあげた。医師である石黒は、事情を汲んで具体化を急ぐこととなる。1月27日には、図書館について初の会議がもたれた^{註63}。石黒の記憶によると、そのときの出席者は、佐平、石黒に加え、上田万年、田中稲城、安田善次郎、大橋新太郎^{註64}、大橋又太郎（乙羽）、坪谷善四郎、大橋省吾^{註65}、大橋幹二^{註66}の計10人。この話し合いを経て、図書館設立へ向けて動き出した。

大橋図書館の館史、佐平、新太郎の伝記をまとめた坪谷善四郎は、「日記」^{註67}を残している。そこに具体的なことは記されていないが、人びととの日々の交流については、一、二行の記載がある。おおまかな流れは辿ることができるので、記述を追ってみよう。

1900年以前には、図書館に関すること、とくに関係者との行き来は認められない。石黒が佐平に助言したとする1901年1月9日の直後から、図書館設立へ向けた動きが活発化する。坪谷は、11日、12日に石黒を訪れ、14日、15日には佐平のところに行っている。16日、17日と上田万年を私邸に訪ねると、18日は上田、石黒と会い、そのあと佐平を訪ね、27日には石黒、上田とともに佐平に会いに行っている。

2月になると13日に田中稲城、14日に久留正道^{註68}を訪ねた。22日に東京府へ図書館設立の出願、23日文部省に図書館設計図の届出、3月2日には財団法人の設立願を提出している。これと前後して、坪谷は文部省に上田学務局長、久留建築課長を複数回訪ねた。この合間に大橋邸において、図書館協議会、図書館会議との名称で会議が開かれている。ここに石黒、上田、田中、久留の名が見える。当然、佐平、坪谷も出席していると思われる。「図書館設立の趣旨」^{註69}は、この頃にまとめられたのであろう。佐平が述べたことをもとに高山樗牛^{註70}が執筆したとされる。

忙しい合間を縫って、坪谷は医者を訪ねては病床の

乙羽のために往診を依頼している。しかし、4月下旬には病状が悪化、6月1日、乙羽は31歳の若さで没した。

(3) 開館に向けた動き

図書館設立の準備が進み、経営組織が整いつつある段階で、石黒は、佐平の申し出に応じた具体案を準備したようである。

そこで余はこう考た。大都の書籍や、古昔珍奇の書籍を調べやうといふ人は、上野なりお茶の水なりの図書館に行くべく、日用切実の本を調べ読まふといふ人は、此の大橋図書館に来(きた)るべく……又子僧とか車を曳く輩(はい)とかいふ人が、門前に荷物を卸して、泥足のまゝで一寸入て……^{註71}

これに対し佐平は、「それは何より結構だから、いかにもそうしてもらいたい」と同意した。石黒によって、佐平が望んだような図書館の性格が規定されたといつてよいのではないか。時期は、1901年2月以降、佐平の生前ということになる。

坪谷の「日記」に沿ってもう少し見ておこう。同年6月、坪谷は、体調を崩した石黒を見舞っている。9月9日、番町にて「家憲」^{註72}制定とある。その後も、坪谷は佐平の病状を石黒に報告に行っている。危篤の知らせを受け駆け付けた坪谷に、佐平は「図書館のことは宜しく頼む」^{註73}と遺言し、11月3日に亡くなる。

年が明けた1902年1月、坪谷は、田中、石黒、文部省の上田、久留を訪ねる。2月9日には伊東平蔵^{註74}が坪谷を訪ねてくる。16日、図書館事務所を開始した。この日、別の資料によると伊東は、坪谷と田中から、大橋図書館の「建設に就て相談に与るやうに」^{註75}と伝えられた。伊東は、東京外国語学校で教職に就いていたこともあり、一度は断るが、強いてというので引き受けたという。3月にはまた伊東が坪谷を訪ねている。5月図書館評議員会、6月図書館協議会が開かれ、6月14日の夜、坪谷は石黒とともに開館準備にあたっていた。

坪谷の行動履歴から、図書館設立に関しては石黒が中心的な役割を担い、図書館に関する相談は田中に、所管である文部省の対応は上田を介して。同じく文部省に属し設計担当の久留には、図書館設計を託したことが、ほぼ裏づけられる。この4名を中心に準備が進められ、その報告は逐一佐平になされ、これらに関する実務の一切が坪谷に任されていた。そして、開館準備の後半に伊東が加わった。図書館主事に伊東を任用したのは石黒で、「細事の経営を委任」^{註76}したという。これは図書館の諸規程作成などのことである。ここで詳しく述べる余裕はないが、伊東は、「通俗図書館の意義に依拠して設立」^{註77}されることに「賛同」して同館の運営に加わった^{註78}。これにより、大橋図書館の管理・運営体制が揺るぎないものとなり、佐平・石黒の

図書館構想を実現する道が開かれた。

(4) 石黒忠恵の発言 その背景

前節では石黒が、佐平から図書館設立の要請を受け、大橋図書館の性格を規定したことを確認した。では、軍医の石黒になぜそれが可能だったのか、そのことを考えてみたい。

石黒は、1879(明治12)年から2年間東京大学医学部の綜理心得の職にあった。その折、医学部の縦覧公開を催したとされる。どういうことかということ「参考書籍等が充分でないと感じたので、その充実を計り、私自身の報酬手当二年分も悉皆寄附して、その資に充て」^{註79}たというのであるから、創設期の大学図書館の管理・運営に携わったことになるであろう。とはいえ、本人が言うように図書館の専門家ではなかった。その石黒の参考になる資料・情報がなかったのかを見ておこう。

第1は、寺田勇吉「通俗図書館を村落に設置するの必要」で、1899年に発表されている。寺田は、1889年に欧米の教育制度を視察、1897年文部省書記官兼参事官となり、このとき第一高等学校教授を兼務していた。寺田は次のように記している。

吾輩の往年教育行政事務調査の為、彼の国に滞在するや、二三の通俗図書館を参覧せしに、閲覧者多くは各種の職工、商家の丁稚、日傭人足等の類にして、彼等は図書館を以て一種の補習学校と為すに似たり、……其普通教育の成果を充実するに於て孰れか最も有数なりや、……北米合衆国が従来力を通俗図書館の設立に尽したる所以のものは実に故あるなり。^{註80}

第2は、翌1899年の渡辺又次郎「学校外に於ける文化開進の一大機関」で、これは『太陽』に掲載された。渡辺は、1897年帝国図書館司書長を経て、1898年第二高等学校教授(執筆当時)であった^{註81}。ここで、渡辺は、学校教育の必要性を疑うものではなくしたが、その他については軽視されていると述べる。では、その学校外の文化開進の一大機関は何なのか、「曰はく、他なし。公共図書館即ち是なり」^{註82}と主張し、第1から第8の利があるとした。

この2論文は、東京市の図書館状況に対する佐平の不満とこれに対する石黒の提起のいずれをも満たしている。寺田は、1900年には東京市教育会の副会長になり、その年11月に石黒へ機関誌の原稿を依頼している^{註83}。坪谷が同教育会創設時からの会員であることから、石黒に情報を提供している可能性もある。石黒は、少なくとも『太陽』は読んでいたであろう。いずれにしても石黒をもってすれば、東京市の教育状況を鑑み、それにふさわしい図書館像を提示することはそうむずかしいことではなかったと思われる。

4. 大橋佐平の図書館構想

(1) 大橋佐平と石黒忠恵

ここまで見たとおり、佐平には石黒に対する絶対的な信頼があった。そのことを整理しておこう。1885(明治18)年、佐平が51歳のとき、長岡で『北越名士伝』を出版している。ここに当時41歳の石黒を収めた。石黒は、陸奥(福島県)伊達に生まれるが、早くに両親を亡くし、越後(新潟県)三島郡の祖家石黒家を継ぎ、苦学の末に軍医本部長となり、海外からも知られる人となった。また、多くの著作があることを紹介する。そして、最後に、青年期に佐久間象山と面会したエピソードを記す。石黒は、蘭学を修めていないので、象山の弟子ではないと主張した。それに対して象山は次のように述べた。

子壮ナラバ必ラズ有益ノ人トラナン、凡ソ有益ノ人、学四方ニ通セスンバ不可成、此理之ヲ説カバ子直チニ和蘭文典ヲ読ントスルヤ必セリ然レドモ余之ヲ奨メンヨリハ、寧ロ子自ヲ悟ルノ日ヲ待ツニ如カズ、而シテ其ノ自ラ悟ル日モ敢テ遠キニアラザス可シト、後果シテ其ノ言ノ如シ^{註84}

石黒が象山に導かれ、西洋の学問に道を切り拓いたことを佐平は評価していた。佐平にとって、石黒は意中の人であった。その石黒によれば、佐平が訪ねてきたのは1887年だという^{註85}。この年の5月に石黒はドイツに出発し、翌年9月に帰国している。佐平が上京したのは前年の11月であるから、年を越して間もなくに石黒を訪問したことになる。

佐平の欧米視察に際しては、石黒、大倉が中心になって送別会を催し、同郷の大倉が私立学校を設立したときには、石黒はその後ろ盾となった。かかる経緯もあり、佐平は、『太陽』に1899年から石黒の自伝の連載を開始する。自伝には、西洋に多くを学び、維新の薩長土肥の勢力を弱小藩出身の石黒が学問によって克服したなどが語られる^{註86}。新潟県で官途を閉ざされた佐平は^{註87}、その点でも一目置いたかもしれない。

(2) 大橋佐平、図書館構想の源流1

大橋佐平が、図書館の設立を石黒に託し、石黒は後半生をとおして同館の運営を支えた。石黒は、また、佐平を語ることでその偉業を後世に伝えることにも尽力した。1900(明治33)年9月下旬、佐平は、こうも語ったという。

欧米には図書館、殊に余り程度の高尚でない図書館が沢山ある。これが皆に読書人に便利を益ふるのみならず、一般教育に向つて頗る利益を与ふるものと私は思ふ^{註88}

石黒はこのときのことを「大橋図書館を設立する一番初めの種になった」と記している。別のところで「発

端」としていることと同じと考えてよいであろう。佐平は、ここで公共図書館の娯楽性と教育性を言っている。これは、博文館成功の大きな理由に東京の読者の存在があったことと関係している。注意したいのは、これは石黒の視点からの、佐平が図書館を決意した理由であること。佐平が石黒に相談を持ちかけたあとの時間経過に沿って、ということになる。別の表現をすれば、佐平が欧米視察へ向かう前に新太郎と検討した時期については反映されていないことを意味する。

では、それ以前についてはどうだったのか。新太郎は、佐平から図書館についての相談を受けたとき、「直ちに同意」をした理由を次のように話している。

国家教育の発達、博文館の事業の成功した原因であります。して見れば博文館の事業は、国家教育の発達の結果により利益を収めておるのであって、決して自身並びに社員のための尽力によってその事業が成功したわけではありませぬ。かつ私の事業がもし郷里の越後、長岡において十五年前のとおりによっておったならば、決して今日の成功を見る事が出来なかったのであります。全くこれは東京市の膨張、発達によって、この事業を成功したのであると思います。^{註89}

図書館を構想したのは上京して博文館を興し、成功したことによるのは疑いが無い。そして、その理由に東京市における普通教育の普及を認めている。よって、図書館の教育的な役割に着目したということになる。ところが、新太郎の視点(坪谷著)からも、それ以上に佐平の意図を読みとることはむずかしい。では、長岡時代の佐平に図書館構想につながる活動はなかったのだろうか。最後にそのことを考えてみたい。長岡時代については、さまざま論じられているので、概要を記す。

1869(明治2)新潟県に奉職(同年辞職)

1871(明治4)有志と長岡市中(しちゅう)学校(長岡私学校とも)を開き、世話人(1873年まで)

1872(明治5)長岡洋学校開学に尽力、世話掛(1878年まで)

1873(明治6)郵便取扱人となり、自宅で郵便業務(1877年まで)

1874(明治7)郵便取扱のため信濃川渡し船を運営(1876年まで)

1875(明治8)この頃、共同で長岡出版会社設立(1877年以降とも)

1877(明治10)「北越雑誌」創刊(同年廃刊)雑誌の売捌きを開始(1878年には書籍も)

1881(明治14)「北越新聞」創刊(佐平、内紛で脱退)同年「越佐毎日新聞」創刊

1886(明治19)佐平、上京

これらを職種ごとに整理すると、新潟県の勤務は約1年、学校の世話掛などが約7年、郵便事業が約4年、

雑誌発行約1年、その後、雑誌・書籍の書店経営並びに出版業が延べ約12年に及び、新聞発行が約5年になる。ほとんどの時期で兼業している。時代の転換点に立ち、多方面に事業を展開した。これを時系列に見ていくと、新潟県を除く約15年の前半は、学校の世話掛などと郵便取扱、後半は書店、出版、雑誌・新聞発行となる。このうち、博文館につながる書店経営、出版販売、新聞の発行に事業の類似性が認められ、前史的な位置づけがなされてきた。図書館の場合は、どうであろうか。図書館との共通性は、教育施設という意味では学校教育ではないか。

(3) 大橋佐平、図書館構想の源流2

そのような観点から佐平の学校教育との関わりを再考してみる^{註90}。それぞれの学校の詳しい変遷は略すが、佐平は、長岡市中学校の設立に関わっている。この小学校を開いたのは、すでに開校していた貫属（士族の子弟のための）学校に対し、町方の子弟に平易で実用的な教育を実施するためであった。その後貫属学校との間に合併話が持ち上がると、佐平は教育理念を維持するためこれに反対している^{註91}。約2年世話人を務めた^{註92}。佐平は、また、長岡洋学校の開学にも関与した。同校は、旧来の国学中心から洋学中心へと教育内容の転換を図り、慶應義塾から藤野善蔵を招くなど進取的な運営を実施した^{註93}。しかし、経営は楽ではなかった。財源不足の事態には、佐平は世話掛のひとりとして学校掛の三島億二郎らと協議して、町内の有力者を訪問、町の共有金から生ずる利子で学校を維持するなどして苦境を乗り越えた。ここでは5年3か月勤めている^{註94}。現在の理事に相当する役割を担っていたといえよう。

本業の新聞発行ではどうか。「北越新聞」から「越佐毎日新聞」へと移行している。社内の内紛が理由で、佐平が新たに新聞社を立ち上げたのだが、大新聞から小新聞へとその性格を変えている。読者層の転換を意図したことは明らかで、学校教育においても新聞発行においても、佐平が事業の対象としたのは、リテラシーの高低でいえば中以下にあたり、庶民層ということになる。新太郎と図書館構想を語った時期は不明だが、1896（明治29）年の就学率は59.4%となり、学校教育の基盤は整備されつつあり、公共図書館の空白地東京に関心が向けられたことが推察される。

そして、もうひとつ。公共事業に対する関心は、何に由来するか。佐平には、「公德」についての考えが明確にあり、それが乙羽にも伝えられていたと述べた。「公德」の初出はスマイルズ『西国立志編』^{註95}であり、その訳者は中村正直であった。同書における「公德」の用例はさておき、佐平が、この書からの影響を前出の談話集「知自心百話」で語っている。そこでは「十二巴律西（パリシー）を懷想す」に共感したとする。

佐平は、いつこの本を読んだのか、それはわからないが、同書は1871（明治4）年から翌年にかけて出版された。少し前の1866（慶應2）年、福沢諭吉『西洋事情』が長岡の書店に並んだとき、佐平は真っ先にこれを購入したとされる^{註96}。長岡洋学校では慶應義塾から藤野善蔵を招聘している。そして1876年、佐平は新太郎を上京させ、中村正直の同人社少年寮に入寮させた。それらのことを勘案すると、佐平は慶應義塾も同人社も熟知したうえで、新太郎を同人社に預けたのではない。少々あとになるが、1894年には博文館から『西国立志編』を刊行している^{註97}。同書が伝えるのは自助論であるが、それを支えているのは西洋の公共事業であるとの認識に、佐平は早くから至っていたのではない。

「公德」についての認識は、石黒との関係のなかにも見出せる。佐平の最後の事業について石黒は、「自身の死期を聞くや、他の事を後にして、先第一に公益に供する図書館の事に言及されしは実に感ずるに余りある事」^{註98}と、私よりも公を重んじるその姿勢に共感を寄せる。また、後年のことになるが、佐平の考え方を、最も顕著に伝えているのは関東大震災ときかもしれない。震災により大橋家は、大橋図書館のみならず博文館、大橋家本邸、印刷工場など関連会社の建物約20か所のすべてを焼失した。このとき、博文館などの本業、大橋邸などに先駆けて再建を決めたのが図書館であった。その決断をしたのは大橋新太郎であり、石黒はこれを全面的に支援した。このときのことを「博文館史」は「館主の命に依りて、公益事業は一日も忽諸にしがたしとて真ッ先に復興に着手した」^{註99}とその顛末を記している。1926年6月、大橋図書館は、同じく罹災した東京市立深川・京橋、一橋の3館に先んじて新築復興開館を遂げた。

おわりに

大橋図書館の成立事情について、時系列に辿ってみた。大橋佐平の欧米視察の前後で変化があり、当初は佐平と新太郎父子が図書館構想を共有していた。視察後は、佐平が石黒忠憲に図書館の設立を相談し、実現へと動きはじめた。その契機となったのが大倉喜八郎の還暦銀婚祝いであった。大倉が、私立学校の設立を同郷の石黒に託し、佐平はそれに倣ったことになるが、佐平が目指したのは私立図書館であった。

佐平の図書館構想は、石黒との話し合いによって方向性が明確になっていく。佐平の病状の悪化によって実現を急ぐこととなるが、そこでの石黒の役割は、特筆すべきものがあつた^{註100}。佐平は東京市における公共図書館の課題を提示、それに対して石黒は、簡潔な内容で大橋図書館のあり方を提示した。それはこの当時の図書館状況を反映するものでもあつた。石黒は、

図書館の専門家ではなかったが、すぐれた学識、豊富な経験と人的なネットワークがあった。佐平の問いと石黒の答えからなる図書館構想は、両者の協議によってできあがったといえる。

佐平の石黒に対する信頼は、同郷の士であることは言うを待たないが、それだけでは説明がつかない。長岡時代に、早くも佐平は石黒の才能を見抜いていた。しかし、石黒は軍医であり、図書館の専門家ではなかった。それでも彼に託したのは、苦境のなかで西洋の学問に学び、身を立て、弱小県（藩）から世に知られる業績を残したこと、また、公益事業に対する理解があったからである。

佐平、新太郎父子には、公益事業に図書館を構想していた時期があった。そこでは普通教育の普及と東京市の発達により、出版事業の成立要件が満たされたことを、博文館成功の理由にあげているが、それに尽きるだろうか。ここでは、佐平の長岡時代の多岐にわたる活動のなかから、学校教育への関与について整理してみた。教育対象を庶民層に置いたこと、西洋教育の積極的な導入など、佐平には教育に対する一貫した姿勢があった。そうした公益事業への深い理解は、図書館の公共性、教育性に通じるのではないか。

最後に、未完の談話集「知自心百話」から、本テーマに関する部分を一部引いておく。

十五 貧民救助

……慈善を行うことは愚の至りというべし。それよりも社会事業に投資すること益あるべし

十九 社会の公益

……公益は皆人任せにするもの多く、……我常に社会の事業に傾意すると共に世人の公事に冷淡なるを歎ず。^{註101}

大橋図書館は、たんなる慈善事業として発想されたものでもなければ、出版事業者の特段の意図をもって設立されたものでもなかった。そこに自己の資金を投じたのは、当時の首都東京に教育事業が欠落していたからに他ならない。この図書館が投じた一石は小さな波紋に過ぎなかったかもしれない。しかし、佐平の遺志を、坪谷善四郎は、市会議員となり、東京市立図書館の設立を提唱することにより、また、大橋図書館の運営の趣旨に共感して主事となった伊東平蔵は、東京市へ移り、市立図書館の基礎をつくった。そうした意味で、大橋図書館は、たんに時期的な理由だけではなく、公共図書館設立の趣意を明示、その展開をはかったという意味において、東京市立図書館の前史的な役割を担ったといえよう。

註1 三康文化研究所三康附属図書館 <http://sankobunka-kenkyujo.or.jp/ohashi.html>（最新引用：2020.12.18）

註2 竹林熊彦『『大橋図書館四十年史』を読む』『図書館雑誌』第37年2号、1943.2、p.81-83. のちに『書物をなでて』（文藝復興社、1948）に収録。

註3 坪谷善四郎『大橋図書館四十年史』博文館、1942. 復刻版は博文館新社（2006）から、別冊付録付きの2冊で刊行されている。

註4 石井敦「公立図書館の100年：活動を中心に」『日本近代公共図書館史の研究』日本図書館協会、1972、p.239-271.

註5 永末十四雄『日本公共図書館の形成』日本図書館協会、1984、p.164.

註6 石井敦、前掲註4、p.246.（引用箇所の論文の初出は、1968年）石井は同書のあと、「日本近代公共図書館史21：私立図書館の抬頭（3）：大橋図書館」『ひびや：東京都立中央図書館報』第13巻3号（通号第101号、1970.11、p.31-34.）で、佐平の図書館設立の意図を『太陽』の編集方針との関係から検討しているが、十分な結果が得られなかったようだ。

註7 石山洋「大橋図書館・成田図書館・南葵文庫の設立」『源流から辿る近代図書館：日本図書館史話』日外アソシエーツ、2015、p.57.

註8 佐藤政孝『東京の図書館百年の歩み』泰流社、1996. のちに『東京の近代図書館史』新風舎、1998. いずれも「大橋図書館の開館」（p.37-44）「大橋図書館の再建復興」（p.126-130）について言及している（ページ数は1998年刊による）。

註9 小川徹、奥泉和久、小黒浩司『公共図書館サービス・運動の歴史1：そのルーツから戦後にかけて』日本図書館協会、2006、p.137-141、169-170.（JLA 図書館実践シリーズ）

註10 是枝英子「大橋佐平と大橋図書館」『大倉山論集』第55号、2009.3、p.23-63.

註11 森崎震二・是枝英子「明治期の図書館論について：坪谷善四郎と雑誌『太陽』の論調」『専修大学図書館学・司書課程年報』第4号、1988.7、p.10-33.

註12 是枝英子、前掲註10、p.31.

註13 同上、p.33.

註14 稲川明雄『龍の如く：出版王大橋佐平の生涯』博文館新社、2005、p.390.

註15 稲川明雄『互尊翁野本恭八郎』新潟日報事業社、2006、p.280. 野本は、越後生まれ、互尊即独尊を説き、1915年長岡に互尊文庫を創設した。1891年、長男の福松が15歳のとき、佐平の博文館に託したが、その後転職して1897年に21歳で没している。

註16 「故大橋佐平翁の逸話」『太陽』第8巻1号1902.1、p.176-181. 初出は、石黒忠恵談「博文館大橋佐平翁の逸話」（其一、番町の邸宅に付

- て)、「博文館社主大橋佐平翁逸事」(其二 大橋図書館)、同前(其三 最後の逸事)『国民新聞』1901.12.5, 12.7, 12.14. 翌年『太陽』に掲載された。ここでは、『太陽』の掲載ページを示す。なお、『図書館:新聞集成 第1巻(明治編上)』(大空社, 1992, p.72-73.) 所収の『国民新聞』の記事は、出典の月日に誤りがある。
- 註 17 「石黒忠恵男の演説」[1902.6.15] は、開館時の演説。「四十年史」前掲註 3, p.27-35. 所収。
- 註 18 石黒忠恵「密教趣味の修養」[1912]『大橋佐平翁伝』博文館, 1932, p.134-144. 所収 初版には、「追懷談叢諸家評論 大橋佐平翁に就て」が収録されている。この部分は、1912 年中に、佐平をよく知る人を訪ね談話もしくは執筆を請い、伝記編纂の資料とすべく保存していた。復刻版では省かれている。
- 註 19 石黒忠恵「建設と復興の始末」[1926.6.15] は、震災復興開館時の挨拶。「四十年史」前掲註 3, p.184-194. 所収。
- 註 20 坪谷善四郎『大橋佐平翁伝』博文館, 1932. のちに復刻版刊(栗田出版会, 1974.)
- 註 21 『石黒忠恵懷旧九十年』は初出。ここでは、次の文献を参照。石黒忠恵『懷旧九十年』岩波書店, 1983. (岩波文庫)
- 註 22 坪谷善四郎『博文館五十年史』博文館, 1937.
- 註 23 坪谷善四郎『大橋新太郎伝』博文館新社, 1985. (稿本の完成が 1937 年)
- 註 24 「四十年史」前掲註 3.
- 註 25 大橋佐平(1835-1901、おおはし・さへい) 明治時代の出版人。越後(新潟県)に生まれる。長岡で「北越新聞」「越後毎日新聞」を創刊。1886 年に上京、翌年博文館を創立。1901 年大橋図書館を設立するが同年 11 月没。
- 註 26 「博文館史」および、田村哲三『近代出版文化を切り開いた出版王国の光と影: 博文館興亡六十年』(法学書院, 2007.) などを参照。
- 註 27 「四十年史」前掲註 3, p.2.
- 註 28 「佐平翁伝」前掲註 20 (以下、引用は、復刻版による) p.101.
- 註 29 「新太郎伝」前掲註 23, p.88.
- 註 30 上田万年(うへだ・かずとし、1867-1937) 国語学者、言語学者。1894 年帝国大学教授、1900 年国語調査委員会委員、1912 年東京帝国大学文科大学学長などを歴任。
- 註 31 「四十年史」前掲註 3, p.4.
- 註 32 坪谷善四郎(つばや・ぜんしろう、1862-1949) 越後(新潟県)生まれ。東京専門学校在学中に博文館入社、雑誌編集に従事。大橋図書館理事・館長。東京市会議員となり東京市立図書館の設立を建議、同館の開館に尽力。日本図書館協会会長などを歴任。号は水哉。
- 註 33 「博文館史」前掲註 22, p.78.
- 註 34 「新太郎伝」前掲註 23, p.90.
- 註 35 上田万年の年譜は次の二著に掲載があり、いずれも帰国した年を佐平帰国の翌年としている。上田万年講述, 新村出筆録, 古田東朔校訂『国語学史』教育出版, 1984. 年譜(p.237-270)には、1894 年「6 月帰朝」とある(p.253)。山口謠司『日本語を作った男: 上田万年とその時代』(集英社インターナショナル, 2016)には、「明治二十七(一八九四)年六月、三年九ヶ月ぶりに帰ってみると」(p.244)とあり、同書の「年譜」(p.534)とも一致する。
- 註 36 「四十年史」前掲註 3, p.3.
- 註 37 大倉喜八郎(おおくら・きはちろう、1837-1928) 明治大正期の実業家。大倉財閥の創設者。越後(新潟県)北蒲生郡新発田生まれ。明治新政府の御用商人として活躍。帝国ホテル、大倉商業学校などを設立。
- 註 38 石黒忠恵(いしぐろ・ただのり、1845-1941) 明治大正期の医学者。軍医。幕府医学所に学び、軍医学校長、陸軍軍医總監、陸軍省医務局長などを歴任。近代軍医制度の確立につとめた。号は況翁(きょうおう)。
- 註 39 「石黒演説 1902」前掲註 17, p.28.
- 註 40 同上, p.29.
- 註 41 「石黒逸話」前掲註 16, p.179.
- 註 42 「四十年史」前掲註 3, p.4.
- 註 43 「知自心百話」「佐平翁伝」前掲註 20, p.115.
- 註 44 稲川明雄, 前掲註 14, p.380.
- 註 45 大橋乙羽(おおはし・おとわ、1869-1901) 明治時代の小説家、紀行作家、出版人。旧姓渡部、本名又太郎。『上杉鷹山公』(渡部音羽)、『千山万水』などの著作がある。
- 註 46 同時代の評価については、たとえば田山花袋「H 書店の応接間」『東京の三十年』岩波書店, 1981. (岩波文庫)
- 註 47 乙羽について、坪内祐三は「大橋乙羽こそは近代日本出版文化史の上で、「最初の編集者」と呼ばれるにふさわしい人物だった」(p.166)としている(『編集者大橋乙羽』『『太陽』と国民文化の形成』(思文閣出版, 2001, p.153-167)。近年では、たとえば次の 2 著がある。西川祐子『私語り樋口一葉』岩波書店, 2011. (岩波現代文庫)、安藤貞之『大橋乙羽: 樋口一葉を世に出した男』百年書房, 2020.
- 註 48 大橋乙羽『欧米小観』博文館, 1901, p.121. 山田三良『回顧録』(山田三良先生米寿祝賀会, 1957)には、万国著作権会議に参加したことを記す(p.40-41.)。

- 註 49 紅野敏郎「大橋図書館と近代日本の文学者」
「四十年史」前掲註 3 の復刻版（別冊付録）博文館新社 2006, p.(4)73.
- 註 50 大橋乙羽, 前掲註 48, p.17-19.
- 註 51 同上, p.57.
- 註 52 大橋乙羽「銀婚園遊会」『太陽』第 4 巻 13 号, p.174-177.「大倉君が還暦の祝儀と、銀婚の慶式との紀年に、金五十円を投じて、一の商業学校を私設しらるゝことを演説された」と記す。これとは別に「大倉氏の還暦銀婚式紀年」の記事を掲載しそこには商業学校の主意書を掲載している（同誌, p.267-269）。
- 註 53 「石黒逸話」前掲註 16, p.178.
- 註 54 『日本帝国文部省第 27 年報（明治 32-33 年）』文部省, 1900, p.106.
- 註 55 「帝国図書館明治 32 年報」国立国会図書館支部上野図書館編『帝国図書館年報』国立国会図書館, 1974, p.195.
- 註 56 「書籍館彙報」『教育公論』第 232 号, 1900.2, p.29.
- 註 57 「東京市教育会規則」『東京市教育時報』第 1 号, 1900.10, p.34.
- 註 58 同上, p.35. これらの事業の実施のため調査部会が設けられ、その半年後には中央図書館と支館が市の負担で設置・維持され、私設の図書館、私有文庫の経営を認めるとの調査部会の方針が示されていた（「図書館設置の方法」同誌第 3 号, 1900.12, p.59-60.）。
- 註 59 「石黒演説 1902」前掲註 17, p.29. なお、「石黒追懷」前掲註 18 (p.140) および「石黒演説 1926」前掲註 19(p.187)は 1 月 5 日としている。
- 註 60 1901 年 6 月、上田は東京帝国大学文科大学教授本官となり文部省専門学務局長を兼任。翌 1902 年 3 月専門学務局長の兼任を解かれている。上田万年講述、前掲註 35, p.256-257.
- 註 61 田中稲城（たなか・いなぎ、1856-1925）1886 年東京図書館。東京図書館長を経て 1897 年初代帝国図書館長。1921 年まで務める。日本文庫協会創設に尽力、初代会長などを歴任。
- 註 62 安田善次郎（やすだ・ぜんじろう、1838-1921）明治大正期の実業家。安田財閥の創設者。
- 註 63 「石黒演説 1902」前掲註 17, p.32.
- 註 64 大橋新太郎（おおはし・しんたろう、1863-1944）明治から昭和前期の実業家、出版人。越後（新潟県）長岡の生まれ。上京して父とともに博文館を設立。大日本麦酒、日本硝子などの役員を歴任。衆議院議員。のち貴族院議員。
- 註 65 大橋省吾 佐平の三男で 1868 年生まれ。東京堂第 2 代社長。
- 註 66 大橋幹二 佐平の五男で 1876 年生まれ。
- 註 67 加茂市立図書館蔵、坪谷善四郎「自筆日記」を参照。坪谷「日記」などの関連資料については、吉田昭子「加茂市立図書館坪谷善四郎関係資料とその意義」『Library and information science』第 62 号, 2009.12, p.145-165. を参照のこと。
- 註 68 久留正道（くる・まさみち、1855-1914）明治期の文部省官籍の技術者。第一から第五までの高等中学校などの建築に関わる。1892 年文部省技師、会計課建築掛長。1901 年当時も同職。大橋図書館建築の計画は、上田の斡旋によって久留に嘱することになった（「新太郎伝」p.90）。
- 註 69 「四十年史」前掲註 3, p.4-5.
- 註 70 高山樗牛（たかやま・ちょぎゅう、1871-1902）明治時代の文学者、評論家。帝国大学在学中に小説「滝口入道」が懸賞入選。卒業後は、雑誌「太陽」主幹。
- 註 71 「石黒逸話」前掲註 16, p.179.
- 註 72 「家憲」は、「大橋共全会規約」と称し、佐平逝去の 1 か月前に定められ、第 9 章第 60 条に大橋図書館に関する規定がある（永濱薩男「大橋図書館のこと」『名著サプリメント』第 4 巻 6 号, 1991.8, p.34-35.）。
- 註 73 加茂町立図書館後援会編『水哉坪谷善四郎先生伝』加茂町立図書館後援会, 1949, p.91.
- 註 74 伊東平蔵（いとう・へいぞう、1857-1929）文部省を経て帝国教育会。1902 年大橋図書館主事。1906 年東京市立日比谷図書館開設準備主事。私立佐賀図書館、横浜市図書館などの図書館づくりに携わる。
- 註 75 伊東平蔵「廿年前に於ける我が国図書館事業を顧みて」『東京市立図書館と其事業』第 48 号, 1928.11, p.6.
- 註 76 「新太郎伝」前掲註 23, p.91.
- 註 77 伊東平蔵「通俗図書館」『図書世界』第 2 巻 4 号, 1902.4, p.2
- 註 78 伊東に関しては、吉田昭子「伊東平蔵とその実践的図書館思想」(『Library and information science』第 67 号, 2012.6, p.1-38.) が詳しい。
- 註 79 石黒忠恵、前掲註 21, p. 240.
- 註 80 寺田勇吉「通俗図書館を村落に設置するの必要」『教育時論』第 489 号, 1899.11, p.3-9. 寺田は、大橋図書館設立時には、東京高等商業学校長となり、協議員に指名された。
- 註 81 日本図書館文化史研究会編『図書館人物事典』日外アソシエーツ, 2017, p.298.
- 註 82 渡辺又次郎「学校外に於ける文化開進の一大機関」『太陽』第 5 巻 9 号, 1899.4, p.23-27.
- 註 83 石黒忠恵「徳育の話」『東京教育時報』3 号, 1900.12, p.14-15.
- 註 84 大橋佐平編『北越名士伝』大橋書房 [ほか],

- 1885, p.55-56.
- 註 85 「石黒追懷」前掲註 18, p.134.
- 註 86 石黒忠恵「況翁石黒忠恵男の実歴談」『太陽』第 5 卷 22 号(1899.10)～第 6 卷 11 号(1900.9)
- 註 87 「佐平翁伝」前掲註 20, p.33.
- 註 88 「石黒追懷」前掲註 18, p.139.
- 註 89 「大橋図書館開館の挨拶」(明治 35 年 6 月 15 日)「新太郎伝」前掲註 23, p.305-306. および「四十年史」前掲註 3 にも収録。
- 註 90 結城伴造『長岡の教育百年』(野島出版, 1969, p.63-68, p.153-156.)、北越新報社編『長岡教育史料』(北越新報社, 1917, p.18-30, 35-47.)などを参照。
- 註 91 長岡市立表町小学校百周年実行委員会記念誌編集部編『町校百年のあゆみ』長岡市立表町小学校, 1971, p.4-18.
- 註 92 『母校の沿革：大正二年改築記念』(複製)表町校同窓会, 1913, p.1-6. 佐平は、1873 年 12 月の学制頒布後は学校運営に関与していない。佐平の職名は、資料によって異なる。
- 註 93 新潟県立長岡高等学校創立百周年記念事業実行委員会編『長岡高等学校百年史』長岡高等学校創立百周年記念事業実行委員会, 1971. ページ付けなし。藤野善蔵(ふじの・ぜんぞう、1846-1885)は、旧長岡藩士。慶應義塾に学ぶ。長岡洋学校で教えたのち 1873-74 年頃慶應義塾長を務めた。
- 註 94 長岡市史編集委員会編『長岡市史資料集 第二集』長岡市史編集委員会, 1964, p.564-572. 佐平は、1878 年 2 月に辞めている(p.571)。同書では佐平の職名を事務掛とする。
- 註 95 『日本国語大辞典 第 5 巻』(第 2 版)小学館, 2001, p.199. 「公益」の意味を「社会一般の利益。多くの人々にもたらされる利益。公共の利益」とし、用例に『西国立志編』をあげる。
- 註 96 稲川明雄, 前掲註 14, p.172.
- 註 97 ス邁爾斯(スマイルス)著 中村正直訳『西国立志編：原名・自助論改正』博文館, 1894.
- 註 98 「石黒逸話」前掲註 16, p.178.
- 註 99 「博文館史」前掲註 22, p.303. 忽諸は軽んじること。
- 註 100 原もと子は、「祖父忠恵のこと」で次のように述べている。「専門以外にも公園、学校、図書館・海水浴場の創立設営などの分野について学び、力を貸す機会があった。自分自身の厳しい勉学の時代において、学ぶことと書物を手に入れることがいかにむずかしかったかを思い起こすと、我がことのように思われて、助力を惜しまなかったであろう。」(石黒忠恵, 前掲註 21, p.412)
- 註 101 「佐平翁伝」前掲註 20, p.124-126.